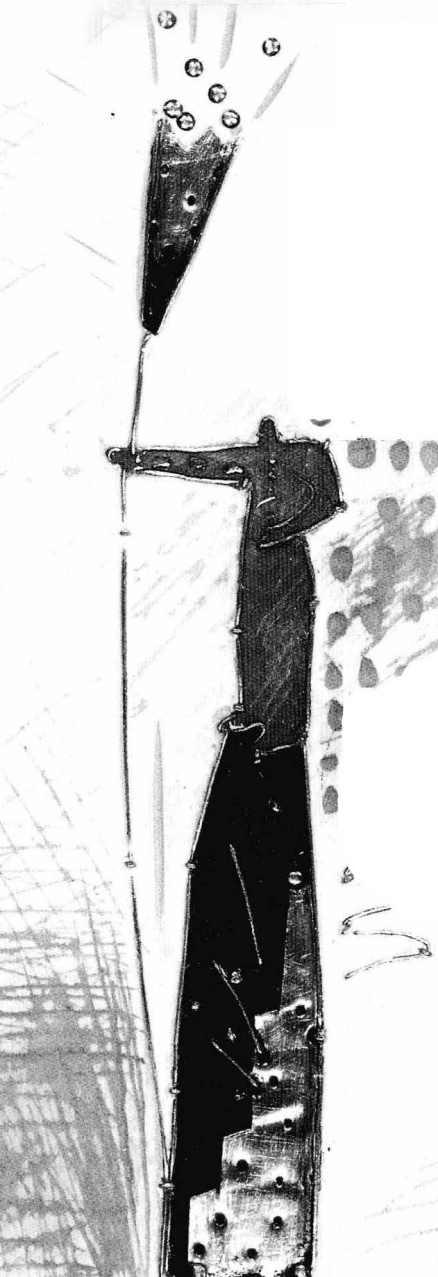
一男去ってまた一難

西舘好子



一男去って　また一難　　定価1200円

1988年12月15日　　初版発行

著　者 ― 西舘好子
©1988 Yoshiko Nishidate
発行者 ― 中村敏夫
発行所 ― プラネット出版
〒170 東京都豊島区東池袋1－32－5
電話 03－590－6781（代表）
振替　東京9-138319
印刷所 ― 凸版印刷株式会社

乱丁、落丁本は郵送料小社負担で、お取り換えいたします。
ISBN4-88191-301-8 C0095　　¥1200E
PRINTED in JAPAN

一男去って　また一難

目次

降って涌いた〝ミッチー暴言〟

手打ち酒を飲む　8
「渡辺さん、絶対許しませんよ」　12
ぶつけた公開書簡　23
「父が、本当にすみません」　36

一男去って——離婚から満二年

あれは陽炎(かげろう)の中の夢か　44
『好子さん』という本　52
不倫、浮気はお互いに　58
不夜城の女王　61
ナント〝不倫評論家〟だって？　66

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

わたしは愛を優先する　69
悪かったとも、後悔があったとも思いたくない　71
離婚は自分がするもの　76
再婚した彼「これからは僕の人生」　79
芝居の初日に殴り込み？誰が？　83
両親への仕打ちは許せない　85
ガラリと態度変えた出版社にあきれた　92
両親を争いの場にたたせたくなかった　98

マスコミって、なんなの？

よくもまあ無責任に　104
すさまじい見出しが乱舞した　111
あきれ返った匿名発言　123

テレビ出演引き受けて…　139
ヒモつきジャーナリスト？　152

愛しき娘たち

「こうなってごめんね」「幸福になってもらわないと」　156
いつかわかってくれるはず…とは望むまい　167
「ままのせいよ」といわなくなった娘　173
悲しい風を暖かい風にかえたい　175

嵐が去って、自立

リブフレッシュ設立　180
女性の相談日　181

さまざまな女性たち　184
〝強い〟淡路恵子さん　201
自立していく知恵は自分で――瀬戸内寂聴さん　205
論ではなく、実践だ　208
アグネス・真理子の〝子連れ論争〟　211
男も大変　216
この先愛が待つか狂乱が待つか
恋する人は勝手な人かも　230
淡い恋、つらい恋もある　235
あとがき　242

タイトル文字――安原　喬
カバー装画――丸山容一郎
カバーデザイン――岩上千栄子

降つて涌いた〝ミッチー暴言〟

手打ち酒を飲む

キラキラ燃える太陽のない夏だった。

ポソポソ雨粒が落ちてきて、東京の夕暮れは陰気な雲におおわれ始めてきた。

「まったく今年はどうかしている」

傘を開きながら、無意識に舌打ちしている自分に気付く。

次から次に問題がふりかかってきて、片付けるのに手いっぱいの毎日がつづいている。

それでも、問題はひとつずつ納得して棚の上におきたかった。

こうなった以上しかたがない、どれも自分の身にふりかかったことである。ていねいに対処し、納得して、次に歩き出していくのが賢明かもしれない。

勇気を持って、勇気を持って、と自分にいいきかせ、赤坂の裏道を歩く。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「事件も終わったことだし、一献杯をかたむけましょう」

世話好きな徳間書店の徳間康快氏から電話を頂いてから、早くも二カ月あまりがすぎている。

あれは、渡辺美智雄氏とのいざこざの最中のころであった。

「きちんと和解をしておいた方がいい。いつか、お互い会える機会をつくりましょう」

という電話の内容であった。

一件落着のあとでもあり、時間もたちすぎていた。もう忘れているにちがいない、と思っていた矢先のことでもある。

「〇日の予定はなにかありますか」

「いいえ」

となって、会食の約束ができた。

古い料亭に入ると、徳間社長が、まことにおおらかに出迎えて下さった。

「大変だったけど、お互い和解し合えれば、ね、いやあ彼とは古くからのつきあいで、みちゃいられない時があってね」

そう話しているところに、渡辺さんが入ってきた。

たったひとり、伴もなく、ほんとうに気楽な雰囲気が座に流れた。

「いやいや、本当に、あの節は申しわけなかったです」

普通のトーンの声である。

ていねいに頭を下げられると、なにか気のぬける安堵感があった。

離婚以来、肩ひじ張って暮らしている意地が、かたかた音をたてて崩れていくような気がした。

話は徳間氏がつくった映画の『敦煌』に及び、やがていま話題の消費税の問題に入った。

「よくわからない」

というわたしに、渡辺氏は実にていねいに、自分の考えを述べてくれたように思った。

雨が本格的に降り出したのか、すだれごしに涼を感じて冷房をとめると、一瞬、静かなしじまが流れた。

「芸者でも呼ぼうか」

徳間さんが豪快にいうと

「芸者はいいよ、三人で飲もうよ」

と渡辺さん。

そのくせ、本当は、さして飲んだわけではなく、どんちゃんさわぎも、つくろうこともなく、とりとめのない話がかわされた。わたし自身は、悪い気もしなかった。

こんなふうに、人とのつながりやかかわりができていくのも、妙なものだなあ、といった思いがあり、それはそれで、きっと人の縁なのだろうと思った。

「渡辺さん、絶対許しませんよ」

林家こぶ平さんの真打ち披露は、林家一門にとって、また、こぶ平さんにとっても、一生に一度のおめでたい宴である。

その晴れがましいお席に、わざわざご招待下さったのは、故・林家三平氏のご夫人、香葉子さんの配慮からだ。

日ごろから、なにくれとなく優しさやご好意を頂いているわたしに、忘れず、招待状を下さった夫人の心配りが本当に嬉しかった。

当日、真っ先に夫人の姿をさがしたが、どこにもお見受けできなかった。

親族の方に伺って、はじめて、緊急入院されたということを知った。

夫人の姿のないのはとても淋しかった。

多分、当日は誰もにその思いがあったのではないかと思う。

夫なきあと、一門の総帥としてのご苦労は、大変なものであったろうと皆が知っている。

その苦労の片鱗すらみせず、嫌味のない社会への登場のしかた、みどりさん、やす葉さん、こぶ平さんというお子様方の見事なまでのしつけや教育、まろやかな笑顔と物言いなど、わたしなどは爪のあかをもらっても真似できない。

そのうえ、人の生き様の上でも、極端な明暗と闘いの日々をくりかえしている駄目なわたしにまで、心温まる親交を下さっている。

いただくお手紙のなんと優しいことか。とくに、離婚の折、あることないことのあきれる報道の最中に、この人は、と思う人が去り、人の情の紙にも等しいほどの薄さを知った身には、優しい心の伝わってくる手紙は、どれほどわたしを勇気づけてくれたことだろう。

その思いがあって、香葉子夫人への賛辞があるたび、自分のことのようにうれしかった。

病床にいらっしゃる夫人こそ、この豪華な晴れの宴を一番みたかったに違いないと思うと、重ねて残念で口惜しくもあった。

宴も終わりに近いころだったろうか、渡辺美智雄政調会長が、いともにこやかに会場に入ってきた。

みる限り善良で福運の相だなあ、などと勉強中の骨相学にあてはめて、額を拝見したりしていた。

「あのね豊原さん、わたし数年前、あの方と対談して、その時のことでいい思い出がないのよ」

わたしは料理を口にはこびながら、隣の豊原ミツ子さんに話しかけた。

渡辺さんが大蔵大臣のころである。

わたしが、まだ劇団を主宰していた時期である。

「ミッチーの美女対談」

という番組があり、その何番目かのゲストとして対談したのだが、不幸にして

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.